

## ■ 札幌市大通



札幌市環境局緑化推進部  
公園管理課維持調整係長

**鈴木 波男**

### 1. はじめに

札幌市の「大通」と言われているのは、一般的には、テレビ塔のある西1丁目から札幌市資料館（昔の裁判所）のある西13丁目までの延長約1.7km、幅員105.45mの区域のことです。

認定道路としては、大正9年に供用開始、大正12年に大通北線と南線に分かれて区域決定され、その後、起終点や幅員など区域の変更等を経て現在にいたっています。

都市計画街路としては、大正11年に計画決定されています。

大通北線に含まれる広い中央分離帯の部分は、昔から公園的に利用されていますが、都市公園として告示されたのは、比較的新しく昭和55年のことです。この区域は兼用工作物協定により公園として管理されています。

一方、昭和14年に風致地区に指定され、昭和63年には都市景観形成地区（札幌市都市景観条例：当時は要綱）に指定されています。

このように、「大通」は法的な面から見ても、一般的な道路とは大きく異り、歴史的な経緯と札幌の都心部に位置していることなどから、その空間は様々な形で利用されています。色々な利用について、各種の数字を並べながら紹介するとともに、「大通」の空間利用の歴史をたどりたいと思います。



テレビ塔からの大通

なお、現在の「大通」は、道路本体がシンボルロード整備事業により、公園区域がリフレッシュ事業により、昭和63年から平成6年にかけて全面改修されたものです。

### 2. 地上の空間利用

西1丁目からの大通南線



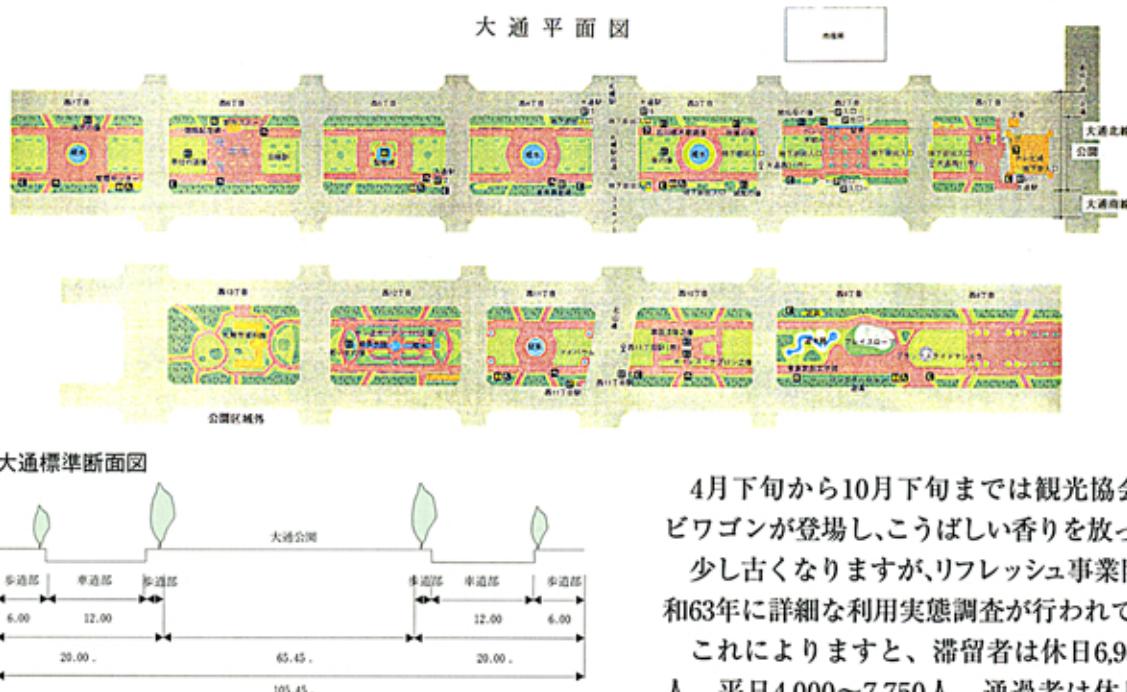
#### (1) 道路

大通南線の道路幅員は20.00mで民地側歩道が6m、車道が12m、公園と一緒にとなった歩道が2mとなっています。大通北線は幅員85.45mで大通南線の構成に公園区域が加わっています。

シンボルロード整備事業により、電線類は全て地中化され、歩道はロードヒーティングとなりました。ハルニレ約200本や多数の株物が植栽され、樹木のライトアップや案内板が整備されて、都心の道路に相応しい風格と快適さを備えることとなりました。

道路本来の利用として四輪車の交通量を見ますと、平成11年9月28日西2丁目における12時間交通量調査では、東方向7,859台、西方向11,929台、計19,788台となっています。

バス停は東西の方向にはありませんが、交差す



る西2丁目線・西3丁目線・国道230号線の3か所あります。地下鉄の出入口が随所にあり、個性的なデザインの電話ボックスが数多く設置されています。

4月末から11月初めまで、西3丁目を発着場として、観光幌馬車が「大通」を中心に観光案内をしており、都心に一風変わった風情を与えています。

## (2) 公園

最大の空間利用は、札幌の顔である大通公園としての利用です。

公園の面積は約7.9haありますが、道路で11のブロックに分割されています。一つのブロックの辺長は丁目によって少し異なりますが、南北65m前後、東西109m前後で、平成5年に8丁目と9丁目は連続化され大きなブロックとなりました。

リフレッシュ事業により電気・水道などの供給処理施設は地中化され、園路広場の舗装やベンチ・トイレなどは一新して、札幌の顔に相応しい公園として生まれ変わりました。しかし、明治時代からの「大通」の空間は、都市軸として大事に引き継がれています。

公園内には、高木51種約1,000本・低木40種約3,600本・バラ約1,300株の緑が覆い、広場・芝生・花壇・噴水・彫像・ベンチ・野外ステージ・遊水路・便所などの公園施設が配置され、市民の憩いの場、多様なイベントの場として利用されています。

8丁目には、世界的彫刻家イサム・ノグチのブラックスライドマントラが設置され、9丁目は、近くに子供の遊び場がないことから、遊具や遊水路が設置されて、幼稚園や保育園の利用で賑わっています。

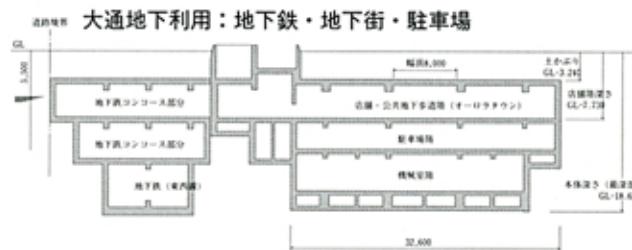
4月下旬から10月下旬までは観光協会のトウキビワゴンが登場し、こうばしい香りを放っています。

少し古くなりますが、リフレッシュ事業開始前の昭和63年に詳細な利用実態調査が行われています。

これによりますと、滞留者は休日6,900~13,200人、平日4,000~7,750人、通過者は休日11,100~16,500人、平日15,200~24,600人と推計されています。

また、夏期休日の利用者の4割弱が市外居住者で、観光客がいかに多いかが分かります。

イベントの人出を含めると、年間一千万人以上の利用者があると考えられます。



## 3. 地下の空間利用

### (1) 地下鉄

地下鉄東西線が大通南線の地下に、南北線・東豊線が大通と交差して通っています。

南北線が札幌オリンピック直前の昭和46年12月、東西線が51年6月、東豊線が63年12月に開業しています。

大通駅の施設や乗車人員等の利用状況は、表1のとおりです。

表-1 地下鉄大通駅主要数値

	単位	南北線	東西線	東豊線	備考
乗車人員（一日）	人	28,399	35,268	16,844	乗車のみ
乗車人員（年間）	人	10,394,404	12,909,421	6,164,916	乗車のみ
地下鉄の深度	m	11.26 (1.05)	16.42 (1.25)	23.7 (1.25)	地表～ホーム面 (ホーム面～走行面)
ホーム長	m	120	170	114	学園前～福住
	m			150	栄町～豊水
職員数	人		125		
エレベーター	機	1	1	1	
エスカレーター	機	0	11	20	
売店	店	3	6	2	

平成10年度のJR北海道の乗車人員の1位が札幌駅で約8万1千人、2位が手稲駅で約1万3千人とのことですから、東西線・南北線・東豊線の乗車人員を合わせると、JR札幌駅とほぼ同じであることが分かります。

「大通」には地下鉄の出入口や排気塔が何箇所もありますが、11丁目の噴水は排気塔を兼ねたものです。

## (2) 地下街と地下駐車場

「大通」の西1丁目から3丁目の地下には、「オーロラタウン」の愛称で賑わっている地下街があり、地下鉄開業と同じ時期の昭和46年11月からオープンしています。



平成12年8月現在、58の店舗が営業しており、通行量は平成11年9月の平日で約53,000人、休日で約37,000人となっています。

昭和38年、地上で始まった「菊まつり」は、49年に地下街に移って、現在も華やかに行われています。地下街のさらに下に371台収容の駐車場があります。



## 4. イベント利用

大通公園では、一年を通じて様々な催しが行われており、占用・使用の申請は年間200件以上にのぼります。

代表的なイベントは表2のとおりですが、そのほか主要な催しとして、5月の「メーテー」6月の「花フェスタ」7月の「花壇コンクール」9月の

「リンケージアップフェスティバル」と「ふれあいフェスタ」等があげられます。

これらの中で、「よさこいソーラン」は学生の催物として平成4年10チーム約1,000人で始まったのですが、9回目を迎えた平成12年には375チーム約38,000人が参加する巨大イベントに急成長しました。

昭和40年にできた「毎日大通を歩く会」は、今でも6丁目で毎朝ラジオ体操を行っています。

昭和26年「白痴」の映画ロケが有名になりましたが、現在では、テレビドラマやコマーシャルの撮影がしばしば行われています。

イベントとして特筆されるものに「花壇コンクール」があります。昭和25年花壇復興が始まり、表2 大通公園主要イベント 平成12年

イベント名	期間	人出	回数	開始年度
雪まつり	2月上旬 7日間	217万人	51回	昭和25年
ライラック祭り	5月下旬 3日間	23万人	42回	昭和34年
よさこいソーラン	6月上旬 5日間	182万人	9回	平成4年
夏まつりビアガーデン 盆踊り	7月21日～8月20日 8月13日～8月20日	83万人 23万人	47回	中島公園で 昭和29年
ホワイトイルミネーション	11月17日～1月7日	—	20回	昭和56年

※大通が夏まつりの会場になったのは昭和32年第4回から  
※ビアガーデンは昭和34年第6回から



よさこいソーラン

27年第1回花壇コンクールが行われました。現在、50社で構成されている花壇推進組合により、ほぼボランティアで、5m×3mの花壇を色々なデザインで造成し、市民や観光客の目を楽しませています。来年、花壇造成50周年を迎えます。



夏まつりビアガーデン

## 5. 大通の空間利用の歴史

### (1) 生い立ち

札幌の街づくりは、明治2年7月開拓使が設置され、島義勇判官が11月に札幌に到着し、本府建設に着手したことにより始まります。

テレビ塔からの雪まつり



島判官の本府構想は、将来「五州第一都」たらんとする壮大なもので、現在の札幌の中心部の北端に本府敷地、その南側に官宅・病院・学校・役所などを配置し、それらの南端に幅四十二間の空閑地を東西に帯状に取り、その南側に本町を配しました。この空閑地が「大通」の起源となります。

明治4年から本格的な街づくりが始まりましたが、大通の位置を火防線とし、南北は北6条から南4条、東西は東2丁目から西5丁目の区域に市街地が区画され、翌年には西9丁目まで広げられました。市街地の地割りは一区画六十間、道幅十一間の碁盤目にしていますが、「大通」は五十八間(約105m)となっています。

「大通」の名称は、「広い通り、大きい通り」という意味から固有名詞化されたと思われますが、当初「五十八間広街」と呼ばれていたようで、「広場」「空地」として捉えられていたのではないかと思われます。

明治5年、区画内道路に道内の国郡名を付けることになり、「大通」も「後志通」という名称が付けられましたが、明治14年の条丁目制により「大通」となりました。

## (2) 空間利用の歴史

札幌の街の基軸として設定された「大通」は、幅約105mの空地であることから、火防線や道路としての利用にとどまらず、明治9年には西3・4丁目に札幌官園により花壇の設置が行われ、明治11年には農業仮博覧会が開かれています。すでに公園的な要素やイベント利用が内包されていたように思われます。

明治9年、西10丁目に屯田兵の練兵場が設けられ、明治末近くまで、現在の「大通」の前身として、各種の利用がなされました。

オープンスペースとしての利用は、今も昔も変わらないようで、その後、その時代時代を背景に、様々な形で空間利用が行われるようになりました。明治12年、西3丁目が馬車輸送の発着場となり、交通の中心の始まりとなっています。

明治13年、豊平館が西2丁目に建設され、以後憲法発布記念会や日露戦争祝賀会等様々な国家的行事の会場となりました。

練兵場は、学校の連合運動会の会場として盛んに利用されたようです。

市街地の整備に伴い「大通」は、散策・休憩の機能を持つようになり、20年代末には芝生や植樹が行われています。

一方で、明治24年に宅地化の要請が出たようですが、幸い実現しませんでした。

明治30年代に入ると、通称クジラの森と呼ばれた西9丁目まで、大通道遥地として整備されました。

明治41年、練兵場が逍遙地として整備され、42年東京の造園技師の計画により、西3丁目から9丁目まで小公園として整備されました。この時代に現在の「大通」の原型が出来たと考えられます。大正時代に入り、花壇が造成され、大正12年に都市計画道路となりました。

昭和に入って、創成川沿いとともに札幌祭りの屋台が出たり、メーデーの会場となったりしています。

昭和14年、風致地区に指定されましたが、19年には、戦時のため芋や野菜の畠と化してしまいました。

終戦後、占領軍のもとで、一時的に教会やバレー・テニス・バスケット等のコートが設置されました。戦後の復興とともに、昭和25年雪まつりと花壇造成が始まり、現在一大イベントとなっています。

昭和30年代に入ると、高度成長とともにテレビ塔の建設、バスセンターの設置、豊平館の移転、3丁目噴水の設置が行われ、数多くの彫像・碑等が設置されるようになりました。

昭和40年代に入って、4丁目に噴水が設置され、46年地下鉄・地下街がオープンして、ほぼ現在と同じ形態となりました。55年都市公園法を適用し、名実ともに公園となり、平成元年より全面改修を行い現在の姿となりました。

## 6. おわりに

「大通」は都心の動脈として、交通の中心として、市民や観光客の憩いとイベントの場として、多くの機能を持ち、その空間を最大限に利用してきました。

一方、憩いの中核となる樹木や芝生にとっては、地上も地下も高度利用が行われ、多数のイベントの巨大化とともに、その環境は非常に厳しいものになってきています。

人口180万人の大都市の中心にある「大通」の空間利用は、すでにキャバシティーオーバーの時代を迎えしており、21世紀においては、この空間をどう保全していくかが、重要な課題になるのではないかと思っています。